

## 第45回「はちしん灌花塾 ～郡上の歴史の補遺を学ぶ～」開催

2月3日（土）第45回「はちしん灌花塾」が本店6階大会議室において開催されました。

地域史家高橋教雄先生をお招きして「白山信仰の拡大」と題して講義いただき、当日は当金庫の役職員や一般参加の方39名が受講しました。



### <はじめに>

大日岳から天狗山、芦倉岳、丸山の稜線を辿る

と石徹白の神鳩に至る。このルートは白山禅定道では「鳩居峰裏差道」と呼ぶ。大日岳山頂からは、この鳩居峰の稜線と白山連峰を望むことができる。

### <白山とは>

白山は本来、大汝峰、剣ヶ峰、御前峰の三峰であるが、白山信仰では剣ヶ峰を外し別山を入れて白山三山としている。主峰御前峰に広がる弥陀ヶ原には白山神社奥宮が建てられている。

7世紀に大陸から能登経由の渡来人にとって、白山は日本の象徴的な山として認識されていた。朝鮮半島で白山は聖なる場所を意味し、渡来人が崇敬の念で最初に白山と呼び、北陸地方に馬場が開拓された。

白山の山麓には信仰の拠点として、石川県に加賀馬場、福井県に越前馬場、岐阜県に美濃馬場の3馬場が開かれた。馬場の「馬」は「幡」のことで、幡は神の居る場所を意味している。

加賀馬場は石川県白山市の白山比咩神社から御前峰を目指すルート、越前馬場は福井県勝山市の平泉寺から白山を目指すルートで、当初は石徹白を経由し別山から御前峰に登ったと考えられるが、中世になると小原峠を越え御前峰に至るルートが開けた。美濃馬場は長滝の長瀧寺から檜峠を経て石徹白に向かい別山へ登るルートと、檜峠から大日岳へ向かい神鳩を経て別山へ登る2つのルートがあった。

### <山岳信仰から修験道の成立>

古代信仰では自然への畏怖から、山を神奈備（神の降臨する聖なる場所）として崇拜し、霊山は山の神、田の神、水の神などの神性が付与される場所と考えた。一方、中国から祖霊信仰（人は死後霊魂が山で先祖神となり、子孫のために降りてくる）が伝わり、これらの信仰と浄土教（人は死後極楽浄土に往生し成仏する）が習合し、山岳信仰が生まれた。

7世紀に山伏や修行僧が山で十界修行（地獄界～仏界までの10の行）を行い、不動明王

など諸尊の力を体得し、擬死再生（靈力を持った超人として再生）を実践する修験道が成立した。修験道者の役行者は吉野金峯山、大峰山系で山岳修験と観音信仰を結びつけ、熊野信仰の開祖となった。

中世になると、登山により罪障（成仏を妨げる悪行）が消滅し、善処（浄土）に再生できるとして、山岳信仰は一般民衆に広がり、各地に靈山を目指す「講」ができ、靈山の山麓には登攀の拠点となる信仰村（馬場）が成立した。信仰村からは御師と呼ばれる神職が、各地にある檀那場（講）を祈祷やお札を配りながら回った。美濃馬場では石徹白と長滝に御師と先達が生まれた。

### <3馬場の成立>

史料には、加賀馬場では白山比咩神が853年に従三位に叙され、越前馬場では僧宗叡が884年に越前白山に登ったとの記録がある。

美濃馬場については、長瀧寺の泰澄伝承（717年白山開山）が残るだけだが、史料の『白山之記』（1163年著）には832年に3馬場が開かれたとあることから、美濃馬場もこの時代に成立したと考えられる。

白山信仰は、天台宗の本地垂迹説により御前峰の垂迹神は白山妙理大権現、本地仏は十一面観音菩薩とするなど、当初から神仏習合の信仰であった。

### <白山禅定道の設定と変遷>

白山信仰では白山へ登攀する道を禅定道と言い、9～10世紀に平泉寺から九頭竜川を上り石徹白経由で別山・白山に登る越前禅定道が成立し、その後の10～11世紀に小原峠を越え白山を目指すルートが定着した。同時期に長瀧寺から石徹白経由で別山へ登る美濃禅定道が成立したと考えられる。

### <美濃馬場鳩居峰の道筋>

美濃禅定道には鳩居峰と呼ばれる2つの道筋があり、長瀧寺の講堂を起点として西の山に登り峰伝いに三国峠（檜峠）に至り、三国峠から大日岳を経て神鳩を目指すルートを裏差、講堂から旧檜峠道を上り三国峠へ至り、石徹白を経て神鳩を目指すルートを表差と呼んだ。

### <鳩居峰二十八宿道>

鳩居峰の表差と裏差には各14、計28の宿があり、修験者は宿ごとに読経などの修行をし白山を目指した。こうした山岳修験で擬死再生を体現するのが白山信仰の根幹であった。

現在、表差は現道路に沿ったルートとして確認できるが、裏差のほとんどが山中ルートのため不明である。

## ＜鳩居峰道の設定＞

10～11世紀に石徹白經由で別山に登る美濃禪定道が成立し、14世紀に鮎走白山神社から大日岳に登り別山を目指す大日岳修験道が成立した。その後15～16世紀に一時中断し、17世紀に鳩居峰裏差・表差道が再興され、19世紀には二十八宿道が成立した。

## ＜美濃馬場の長瀧寺の創立＞

長瀧寺は伝承により717年の創立となっているが、史料では828年に天台宗に改宗し、1271年の大火により社殿が焼失し、1290年に大講堂が再建されたとある。

## ＜白山案内図と白山曼荼羅図＞

郡上には江戸時代に作られた「白山案内図」と「白山曼荼羅図」が残っている。白山案内図には美濃禪定道の登攀ルートが描かれた。白山曼荼羅図には最上段に日月と白山三山、その下に3山の神々、6所の王子、3種の眷属、最下段に聖域に入り白山神を拝み見る泰澄と2人の行者が描かれており、白山の本尊として各地の講の人たちに配布された。

## ＜石徹白、講一般の登山参詣者＞

10世紀以降に石徹白は平泉寺（越前馬場）の支配を離れて、東海地方を経済圏とする信仰圏を構築し、長瀧寺とは別に社人組織を形成するなど、別山を核にした独自の信仰形態を構築した。

白山講の一般登山者は、白無垢の着物に笠をかぶり筵と食糧を持ち、講の代表として5～6人程度で登山参詣した。

## ＜石徹白御師、先達、山伏＞

白山中居神社の社家（神職）である御師は、昭和の初めころまで冬になると白山神の羽織袴姿でお札や薬草、布針、絹などを荷車に積み、東海各地にある檀那場（講）を回り、1冬で1年分の寄進があったと言われている。

長瀧寺の宿坊には先達と呼ばれる修験者や山伏があり、兜巾に鈴懸、結袈裟、脚絆の姿で、白山講の参詣案内を行った。

## ＜まとめ＞

最後に先生は、「石徹白御師や長瀧の先達は白山信仰だけでなく、郡上の産業や文化を東海地方の信仰圏に広めると同時に各地の産業や文化を持ち込むなど、郡上の産業や文化の発展にも大きな役割を果たした。」と締めくくられました。

